

竹が生え

萩原朔太郎「竹」は大好きな詩の一つだ。「光る地面に竹が生え、／青竹が生え、／地下には竹の根が生え、／根がしだいにほそらみ、／根の先より纖毛が生え、／かすかにけぶる纖毛が生え、／かすかにふるへ。」——前半では、青竹の地下の様子について、根の先、と述べ進めていく。最後には、微小に密集する柔らかな「纖毛」が「かすか」に「ふるえ」という生命としての柔らかな姿。

後半は地上——「かたき地面に竹が生え、／地上にするとく竹が生え、／まつしぐらに竹が生え、／凍れる節節りんりと、／青空のもとに竹が生え、／竹、竹、竹が生え。」今度は空へと視線が上昇する。「まつしぐら」は一直線に速いスピードで突き進む様子だ。なんと「力」を感じる竹の描写だろう。「りんりと」（「凜凜と」）は寒さを表す。「凍れる節節」という、「寒さ」と「固

さ」のイメージ。さらに、最後に「竹、竹が生え」と繰り返すことで、複数性、連続性が暗示される。なんという竹の生命力。

音数律も前半部分はそろわない。が、後半部分は、八音と五音で微妙にそろう。いつのまにやら、リズムが生まれ、連用形の、連続性に、乗せられていく。調子ができる。このリズムこそ、生命力の、ほとばしり。

そして、注目されるのは文の終わり方だ。すべて連用形である。連用形とは、用言すなわち述語が後に続く形。「竹が生え、ソシテ」のように、次の述語を予想させる。言い足りないから不安定でもある。しかし、だからこそ、「次」を予想させ、その連続性に引き込まれる。終わらない連用形は、無限性すら暗示するのだ。終止形に直すと、安定するがぶつ切れになる。ちなみに、同じ詩集の中の「地面の

早稲田大学教授

もりやま たくろう
森山卓郎

底の病気の顔」という詩も連用形。もう一つの「竹」という詩も連用形。「ますますなるもの地面に生え、／するどき青きもの地面に生え、／凍れる冬をつらぬきて、／そのみどり葉光る朝の空路に、／なみだたれ、／なみだをたれ、／いまはや懺悔をはれる肩の上より、／けぶれる竹の根はひろがり、／するどき青きもの地面に生え。」——多くはないが連用形の詩はほかにもある。

朔太郎の詩論を見れば、音韻構造上「韻」が踏めない日本語の特質を見極めつつ、詩の言葉とは何か、考えたことがよくわかる。この連用形の「ぶつではない」終わり方も詩としての言葉の冒険だ。

というわけで連用形の冒険を試みて、「て」の形も含め、連用形だけで終わるようにして書くとして。——でも、言い切らないのは結構大変なわけ。むむ、どなたかタスケテ！